



秘注
誹諧七部集

炭俵卷
六

5
4514
3



門 5
號 4514
卷 3

秘注新詠七部集卷之六



依巻

とらりくつ 新子の啼 立 野坡

の作三三用不舌法長調半と意と整て内を但梅三稚子と移は流然草七古實

日言三所二梅枝三稚子三内三奉三ナリ

九のあふは法を春の日は透三お負をも三三三全

日仲春の風情ト云テ農家ク暇ナルヲ言リ

上の 候りしあうる 米の 五可表 八の

昭和十一年
一月二十三日 購求

到くと云ふ出すお代名のころり

味増へ用アルは年回當りて言意ヲ附ナシテアリ

空霄の尾のお病を押しさす 坡

死後々噂ナレトトクト言語慕フ心ヨリ言ヲ為テ尾首病ヲ止メテ母ニシタリ但

死タルヲ在余ノ人トシタル変化ナリ

昔は弱きころり ありはるは良お

是ヨリ去テナシテ蓋ニ合意ハ弱ク附テアリヨモスカラテ語名月ヲキ也猶持病ト言

餘情附与ニシタリ

初佳子夢み掛り此れありさるる 坡

曉侍より旅を体ヲ附タリ但名月初佳移り也前ヨリ再録有体アレハ物ニ

念入体ヲ附タリトシテ念入カキナリ

あをさあのころりお念ひしは枝 為

具今供ニテ割ナケルヤウニテ者可成

可衆のころり 酔そあめは 坡

蓮座實ノ居合トナシテ敷ヒノ場所ヨリ言ハ所衆ハお越リ武蔵ノ変化也猶一又テ語

酔文ハナシキナリ

門を押しさすおのあお佛 為

〇ツラリトナシテ坐鋪トナシテ附タリ壬生念佛ハ三月十四日ヨリ二十日迄狂ニケル踊アリ

○残心下博ニテ面白ク言リ但黙クテト言フニ拾テ詞トキナリ

神子トシクニ居ノ様子振舞ヒ

為

○五本集也附意ノ意併テ合用也

まじげまじり 降ぬ 浪人

坡

○其振マコト見込テ来ル浪人也亦此春モト言三則ク其手ノ詞ニナリ

法下ノ湯治ヒトシテ言フニ

為

○換骨ニテ引オドシカクカクノ人ト為テ法印ヲ送テロタリ

野をとりてまきまきの出

坡

○時節ノ會釋ニテ其書ニテ解キ言リ

との家ト東の方ニ也ヒト

利令

○其村里ノ体也但前ク一面見渡シタル体ヨリトノ意モト言リ

魚ノ首あり 溪ノ新炊

為

○其カクミル也漁村トミル誰モヤスキヲ

為

ちくちくつねく 空ノ好る

披

○流俗ノ下為テ好物ノウスキナトモ寒ク詞ニ聞ユタリ

未直ノ言のさすぬ 界

為

○前ク怨ル語脈有ヨリ果テ語ニアセタリ

誰ノ知ラズ 以嫁を連ス

披

世間憚りテナリ

屏風の影に新しきおる葉子魚

おの

〇若クハ多キ有テ爾レニ移タリ

三吟

第好し是歳より花さきり

嵐雪

〇兼好法師或年撰津國阿部野川言所引込余松丸ト言者ヲ從テ花ノ

為タリ但花盛年トキ物盛定ニ云クヤリ

〇花見ノ下ト定テ辨當ノ踏トシタリ

〇其ノ躰ヲイフ

行そよ、表のお板のわたりを

野坡

〇不自申ニ躰有ヨリ旅躰ニテ天氣振ヲ言フ小坂ハ木樵ナドト通テ道ヲ言

〇春ノ字ヨリニキレシク在時今ナリニテ春ノ用カ心ニテ秋ノ字ニ移シテ其相可カク

語進部ノウナリ

〇其ノ躰ヲイフ

雪

○年ノ暮ノモヤウ有ヨリ雪ヨアミラナイガラツナスキハ掛取ノ禁也

人のさりくぬ 松多むじやうり

午

○雪松移リテガラ跡アルヨリ人足ウズキ禁到場ヨ附タリ

雑役の輪紙下せハ口のなるを

坡

○本鏡知又賤ガ庭松トミテ附タリ雑役下ニ馬也馬舎ガクテハヒキナリ

何のナメぐるサキトカキヨ

雪

○石マカラテ前ヨリ鷹ニシテ附也暮三月ハ移ナリ

何とる鳥やまゝノ秋の鳥

午

○前ヨリツマヌ自然附ク可味

暮る 松多むじやうり

故

難路見るとすハ新道はよく

坡

○雨ニ露ヲナリ附タリ前ヨリ無用ノ存也変化ヨ可味

なまのふも。起敷の黒土あり

雪

○ハカクテトスカタラセ也ハカカミニナリ

松多むじやうりの傳はるる

午

○子願ヌイタラ安カタルヨリニテ鍋炭ノ附タル水取薄ニタリ小使ニカケラレタ名ニキ

ヤスアリ担換骨也

海月の名物

坡

○後附也カケ寄テ抱上タルヤスアリ

雪

んくらうしきりのせんまきく
雪

富家似合ガレ体ナガラ情ヲ附家室ヲ遊ムルハ
坡

婿の来エ始のせうハあまのり
午

シキ入トシテ娘言ヲ渡シタルヤウスニ言ハカリテ娘可成
坡

あふしのまふ何もさるめ
坡

ニカカラミテ附也出今者下トクシリモマラフ言リ
雪

念佛の細き山又さるる
午

本尊相ナク獨下附タリ細キモカスルモ之ニキ僧ノモヤ也
年

念佛供養ナドニテ人偏ノ遠慮ヨリハ鳥見ニ此興ニタリ附也
森の穂ハあふ風中吹倒也
坡

附意ヲ意明也
雪

多場の煙の流す寸毛月
雪

ヒツカリトシタル所可味
坡

空のくまのり戸清人ハあふ
午

クマのくまノ言ヨリホドフリニ意味薄シタリ
坡

カク子居司の口ハ何れもやん
坡

一句意ニテラホドストハ帳外意ナリ
雪

春のふりふりつるをさる押しの

雪

の事調ブル侍、東江侍有ヨリ其同理ヲ合テ托物ニタリ

云々

午

の月、遊匠と云は言、可味但手、為作ナリ

海念の使のせんをさる

坡

の前、夜中迄、星月、おそ有、夕言、語、脈、止、鐘、念、返、向、出、り、但、障、物、出、走、ラ、ス、ト、キ

うー

雪

の昔、作用ナリ

獨ある母を御す花の影

午

の前、不用、附、名、手、作、テ、細、引、ウ、カ、ウ、用、花、見、辨、當、目、包、合、用、エ、ク、

やう

坡

の身、初、テ、ト、言、者、行、ト、為、テ、好、物、ノ、餘、ヲ、貯、キ、キ、ル、ト、言、リ

深川

そらまゝのまほまゝの家の

孤屋

の老、余、余、ニ、シ、サ、他、ノ、映、立、ク、ル、色、下、モ、言、モ、可、言、但、自、然、所、以、整、齊、テ、聊、モ、作、意、ヲ、用、テ、實、ニ

正風之作也但市守や夢田野景色や脈や心風雅可味且元禄頃深川

ノ翁邊の家長ニシテ田舎同前也誠隠者可任處在ヨ今、寸地ナリ

繁華ノ地ト成ケリト云々曰今、旧庵跡松平遠州候中屋浦ニテ油堀ト云ル

脇ニテ古池ノ古跡存也

ちのよの水鏡のまじりる海川

○夜多ミ珍シカル辨有ヨクヒルノ水鏡跡ヲリ言テ其ノ夜言海川

出居をて回さぬなるの可憐にて 出水

○兩日薄シク自然ヲ可見ク夜々勿論暗天モヤナルカク附タルト張ト單物浴衣ウモセ

まろく娘ハ海の家ナ 利年

○雨ツクモ樂ミナル侍ヲ言リ但ツト言語モ餘情アリ

持てしるは侍も持てぬ家も月 為

遊ナド出歩行ホト不侍也セタゴロ夜賑ヒト弘ニシテテ舞亭新歌舞ト云

とくくく一埃のこぼるゝ女侍 屋

○折悪舗事有侍令死活ヲ可味

まろくくすサ新下り啼出し 弁

○本都屋等ナリノ堀トミナルベニ白ノ間ニヤナル所ヲ可感也附テ理屈ト不附ト

正風ニ言ラユ言ハキルクスサ新ノ下ニ啼出止テ是理屈也 瑞翠等ナリト云ト下ニ侍ナリ

○是不附本及是正風也其言能可味

晩の侍りのまのまをねと 水

○離テ附ルル也但仕事サ新ニ用アリ

○朦朧タル春宵に閑然と云フヲ寄至アリかミ在ノ語モ又用アリ

ふゆふ 漸く中のいささなり

水

○後附也言ワシルカ子言モ水泡下成ヌル思ヒナリ

いふち 指をを止入あつた

午

○更無用ノ附ナカク非義ナリ言餘情ヨモ

はくらのむねをいふ 海なる

海

○後口附ク方一意に可言餘情却ニ落人下ナリイ直ニ成^先玉ヲ倚アリ野邊

○逆モ世禪ルニナリ

いささなりいささなり 今我 日暮り

屋

○前後ヲ忘ミタル作ヤ

あつたのやうにささくんとあつた 行せよき

午

○前ノイ事ヲ薄シタル故行ト云リ一カノ餘意ヲ見

いささなりいささなり 指を 燭を

水

○袖對面遊女面歎ナリ

かろの けり 空のあつたをいささなり

屋

○今ノ門ノ語脈ト言サシテト言自然ノ可味

年貢をいささなりいささなり

海

○縣令巡見ト云也但雪豊年ノ貢ト言ハ諺モアリ

水

身は災なり 祖又り白髪友の女をたさよ

の奥言ラレタル人ヨ言リメテタテノ語心養ラレク白ナリ

堪忍あきらめ 七つ 思

の徳ケル父耶曰野出テ残ヨ者愁ムル毎言外ナリ

名月のワタリ 念をくさる 芋圃

の早ク富人愁ル所ナリ

アキラケ しのめそ 何ふさる 休

の間ニ合タル語ヨリスク言フ下ラキテ時節ナ相慮セリ

げんい 家の 国も 屋らほ

水

午

翁

屋

床

會釋ノ附ニテサロシキヲ助ケテ消セ但暮秋ノモヤラシ

の ねき くの 河 こと けり せ

の寂冥ノモヤラシク夕風情ニ會釋セリ

よしと せと こと けり せ

の幽ト言ヨリソシク風ノウケ有テ朝轉シタリ

晒の けり せ

の日和見込テテ有タリ

あきらめ 七つ 思

の人倫ノ噂ヲ故ナクハ消タリ女ヤリト寸ヌル語トキテナリ

水

午

茶のそゝあゝにさゝたんあゝ

。女カリト言ヨリ餘單ナニ作レリ但本凡ハ割ノ類ニ有テ草蒲公英トヤサキ
。單名ニテ女ト音聲タリ如外解チ續クトイユニ轉スバ不若見ニカラズ

百韻

子多 稗父 いたらそ 早稲舟 利年

。一乃ノ餘情ハ農業ヲ憐ム辨也テラトトシテ言フト予單名也俗ニ
トテラトト意見ヨリ出タリ木下長喙子ノ歌ニ一たのしき夕歌柳の
下流ニ火ハてらそ女ニカクテトヨメリテ歌ヲ撰トセリ
。會發 音ニシテトヨメテ 女ノ聲カトヨメテトセリ

弓のさ次 のさの向 弓 野坡

。且場也但子モ父モ馬カトニ真由映ト言語ニテ余餘見意附ナリ
。可あゝ 隆 殿 ちや 鳩の啼 けを 孤屋

。雨後音者ニ映出タルト語ニタル消ス入ノ三釋ニテリトヤチヤチヤ
。ちや ちや ちや ちや ちや ちや 西風 午

。キケニカラミテ四ノクリノ輕ミテ可見
。半作ニ多カシの袖ニあゝり下のを 坡

。改寄タルヤリ
。あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ 屋

○二万ノ間ニサノ集ルサマニ

さるの月ニ葉の如けつる序

午

○聞ト見トク愛ヲ含テ飯時ノ風情ヲ言リ但在野ノ飯ニ得タリ

掃ハあとのく檀ちるるり

坡

○鍋ヲカコシテ取捨テ直其間ニ庭春ノナドハ掃菴キニルニ

ちりあとの才ニトク翠雀のあ

屋

○組屋鋪ナドニテ買マキニ

ほろも如きしやうり化平元

午

○禪門ノ死活ヲ見但浮世同心飲クワ寺成

屋

松栢や矢川ノくく

坡

○右利ヲ放下シタルトシテ不用ノ地ヲ出シ住ルトモタリ

吹くも脈もはくも

屋

○建テ床ルノ餘情アリツラキト言テ女侍ニ愛化ヌヨシ

十二三辨の衣裳のくちり

午

○十三年路ヲ言辨官服ハ紅也禁中ニテ追儼ノ夜殿上ニ並グヨシモ可成

本り生ナリ

坡

○二百三章ヲ入組大會ノドイマタ始マラヌ節ニアソビ在エルサマナリ

日のあし方、あらむ竹の色

屋

○百度子度語ナドニテハ堂ヨ巡ルヤストナニ堂ノ前後陰日南ノ風情ヲ言リ

只云 砂岸ガ 嘯く 水 午

○日者中ノ風情有トシテ流ヲ飯向ヨリ

くははぬのころの 詞を 雲の 神を 坡

○關ノ清水トシテイニウシク 詞ト書ニ説アリ 湖水ノ浦ニ 詞所ニテ変トク言ヒ

又ノ枝笠ト云フオライク 通例ガイテ遠近テハラテイフト是ヲ言リ

了なきの あよ くの 月 井 屋

○初旅ノキタロコ言リ

せぬの 雲ノ 阿 あり 玉 體 傍 将

○浦ノ緒トシテ生ガレト書ニキコメル月ノテリアリ

標の 雲ノ ころ なる の あ 相 之 屋 坡

○暮ノ秋 飯ヲ 整ヲ たり 但 眞ニ ありト 言物ガ 芥モノ 仁業ノ 子ノ 子ル ども キサリ

子 雲の 雨ノ 傳ノ 之 毛 屋

○正花ヲ 消セル 御感アリ 但 遠否 柳也 在 躬 亦 論ナガラ 小 休所ノ 茶屋ト 言也

御 影 供 以 の 人 の 子 り 坂 午

○連ニ 女有トシテソノ 言リ 海影 供ハ 弘 法 大師 法 會日 三月 廿 日ナリ

初 之 く と 二 口 者 之 の 雲 而 出 坡

○夕 夕 病ノ 世間ヲ 羨ス 情ニ

夕夕病ノ世間ヲ羨ス情ニ



ほろくおろの脈子とる

屋

○モシル醫者トシテ但餘惜ハシ落ノ業ノ大クハ其ニ極端ニ切アリ

おろの脈子とる

午

○貧王ニ換骨シテ哉ノ論ヤクウス但シ之ノ又ト言ニホリト言振テニホリトキト言ニヤ

おろの脈子とる

坡

○戀情ニ換骨セヨリおれヲ外大但愛羽ト言テテクハ本體又ナリ

おろの脈子とる

屋

○年計不ニ言傳シテ

おろの脈子とる

午

○六月參勃殿中ノトシテ言ヲナキ体ト言

おろの脈子とる

坡

○早ニアテト立括ル其ト言附テ

おろの脈子とる

屋

○寺院ノ境内廣ク圍トシテ

おろの脈子とる

午

○會集ノ所化可成

おろの脈子とる

坡

○かえり果乃風情ナラシ重クキト言語ノ病人ノ用ナリ

おろの脈子とる

屋



つとむるゝのなをいへりふあや

屋

の童々ト言フヤニ意持シテテスケタル年賤風俗ヨリ

所の暮のをうね井のこゝろ

午

の聲高ナルヤウ有リ遠キ語リ男に汲スドま店借通例ナリ

芳の月橋よりあつた古

坡

水汲時分會釋也但水汲行ニトテ邪魔ナル作アリ

芋茎のちね餘る特午

屋

の前白カキキテ當白ク儲蓄附トスツテも男ナリ

心つきりあやうき浄土寺

午



の廿三ノ風情ヲ移シテ餘情亦出初穂ナキ直ニ行ク

産物さうきりしほ品のみね

坡

の盆敷宴ト来ナリ

成造り守 根と橋 忠と精あは

屋

の山人小屋ニ交カ

赤いゆき雪と新らしむるち

午

の安集ヲ附テ本蔭ノ月ニアツ又言故トタル餘意ナリ

淡きそらと宿の界はあをり

坡

の三ツ通リタル噂也嘗テ未試ヨリ

屋

師を以て兵尾の神のまゝとす

屋

。前より通風情にて當り神のまゝに坐す可成

地

。格強の句を平と書かんとす

午

。年ノ用意にて費はすは他ナリ

平

。て海の妙をまゝと書かんとす

坡

。當り前より組サレノ海也但天満ノ交易自其地也猶言

屋

。後神をまゝと書かんとす

屋

。呼掛テ頼みたりまゝに作ナリ

地

。まゝに頼みたりまゝに作ナリ

午

。是引張の語朝風イナ姿有ヨリ朝観音ノ誦向出クリ

。燃まるとか新を座を拵る

坡

。水盆屋ナドノ女語コカレナリ

地

。十四五兩のゆり

屋

。取有世帯ノ間ト姿ナリ

地

。日ひふりまゝと城の流を

平

。當りヨ得テ町ノワツカニ残リヌルモヤウナリ

平

。弦子花はを取

屋

。其場也城ニ弦子ノ名ヨ會釋ニテモツクノ作也

地

機嫌よくて、暫くして、

此附添き辨り、理屈、落、唯、海道ノ海陸産業ノ對附、可見

かゝるもの、此の、

小書ノ語、用、

極端に、

静ナルト、言、所、又、附、

海の、

附、意、為、明、也、

來、

坡

午

屋

坡

午

念、入、ミ、ル、ト、ハ、物、ノ、午、後、有、テ、

氣、

七、

居、家、ヲ、移、ス、件、ノ、暫、地、ノ、カ、

當、

ま、

掘、出、シ、物、ヲ、見、テ、

中、

致、使、人、薄、シ、テ、

坡

午

屋

坡

午

屋

屋

屋

坡

午

屋

坂王守れそぞを二ッ屋

の古ギカラミキカカリテ未タル物アリト見

らよとあんなく 海川一ッ屋

の二ッ一草ニ消タリ 都見物又下ニテキツク 祇園清水ケツ 遊城ト云々也 但クシカリ 遊

厳格ト書テ折目高ト讀キコニホテ替ツタト言フアリ

ッ屋のよりのゆきを海川一ッ屋

の寂ニキ風情ヲ消タリ

心とつらなりに 鏡れ一ッ屋

の前ウニ組セズ時節ノ景ヲ物ヲ念置釋キ言但恐新着屋ノ間 遊城ト云々也 但クシカリ 遊

残さし一のサ流虫ちきるの月 坡

の市場ト見

なめあそと表の場合 午

の掛置タル梳モミタルベニナクキナク楼ニ生ス

眼を流しそと 屋

の戦ニ場ノ頭ニテ其場ヲ空ニ因リ消タリ

又彩と一と 坡

の苗キ意ヲ久惜ニ後ス但百古鳥ヲ取ミツヨカフ日ニ又頼ミキナリ

かろしと一才の己より 午

○赤頼ノ語ハ自由ノカミテ頼ヒノ有サヨリ

くまのく人子味傍をさ出丁

屋

○昔トシテミソノ任込ト頼向セリ前向ヲ毎事ニ換メヨリ哉論ニ

節違ふ事後裕の流四川

坡

○言ハ出ス婦人ノ澤ナリ

あまの屋のさねる者のさつ

牛

○驛着ノ年秀女トシテ城下ノ合ヲ附メテ公の事

あまのくさくを帰らるる空ちき

屋

○御倉屋ヨリモ見物可見

地

水菜より篠まるとあ

坡

○カトルコレ下キ加例ニ有事ナリ

まの内引越とあ

手

○山莊類ヲ附クリ惣計ト言夫家類リ但裡原ノ治也水菜京地名カサ所ナリ

屋焼リ

屋

○其家借ノ附會釋ナリ

あまのくさくを帰らるる空ちき

坡

○是者心階ニテ前部脈ヲ察シテ洋ヲモ厭フ又家未風惜雨音ニテ聞セタリ

あまのくさくを帰らるる空ちき

午

○マニ、雨ヲ厭フ俸ニ附タリ

掛まろこお上の浦名をのびる

屋

○取向屋モヤウナリ執中ノ可言

持まろこお上の浦名をのびる

屋

○小テ雅共成

大水の安んぶ小畑の砂の多し

午

○境目論ニ薄シク

何々々々々々々々々々々々

屋

○流ま北木ナリ

坂

浦名をのびる同心の流まろこ

坂

○想を鋪ノ樹木轉不

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

午

○更ニ無用ナカラ自然ノ可味

投まろこお上の浦名をのびる

屋

○其用ナ言

是れは乃乃乃乃乃乃乃乃

坂

○前乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

里歌をのびる乃乃乃乃乃乃

午

宗子 けりし 七 ね ね 妻 八 午

○文集三ノ後附也餘情ノ餘缺ノ働モ由来ス村世語彼親父ノ分別者ナリ

暑病の けりし 七 ね ね 妻 八 午

○又文集三ノ二ノ章の論

衆の けりし 七 ね ね 妻 八 午

○又文集三ノ知テ其方意ヲタリセル又集後附ノ童子ノ此首韻ニ餘情ノ曲世語古人骨折

減し けりし 七 ね ね 妻 八 午

○毎度ニテ目トナリタルナリ其方ニテ此ノ人ニ不可得

の けりし 七 ね ね 妻 八 午

○責トスモ夫用テ四内ノ本有タリナリ

彼 けりし 七 ね ね 妻 八 午

○寺院門ニ換ルル被屋ノ一字ニ聞セタリ

三人 けりし 七 ね ね 妻 八 午

○二ノ一章ナリ下ニ吟ハ移リ更ニ吟ニ移リ迷タリ

秋の けりし 七 ね ね 妻 八 午

○秋天高シト言ル詩賦ヲ述タリ身股感スルニ餘リナリ峰ニ下ニ立テ立テ移リガマナリ

是 けりし 七 ね ね 妻 八 午

○是色ニ言テ迷ニ難ニ高ク誠ニ長高キ句ナリ

一羽海にける

孤屋

○ヤト海に引連テ附タリ連テ附ト云フナリ但テ右画圖如シ

新子務下日備抄の貝の吹

其備

○前夕、晴天、飯上ル、常ニ変シテ細引ノ人ヲ集ル貝ナリ

月のりつゝ 四廊北門

角

○其場ヲ轉シテ都城ナドノ普請心也但月、夜後夕ノ天ノ象ニ依テ云レリ

祖父のくもれは痛く及手なうり也

令

○阿耨婆海ニリ日備ノ夕ニ遠慮者ナリト云集セリ前注意ナリ云集ト言意ヲ前夕ニ

○年皇前夕ノ解ヲ大集ニ終レル物云集ト解ニテ云哉ノ夕ニ論ナリ

屋

了らむとてくちをさへ返す寸

○前夕ノ暮氣甚難ク振レ聲有リ聲言テ意危キ路ニ苦ク解也ト云ニ論ナリ夕ニ途作

ニ言リ意ニ場ヲ云哉批判有テハ解用ノ変ナリヲ辨セカレ故也云ニ章ト成ケル夕ナリ故ニ

○云哉ニ論ニヤラズカラレ所也猶晋子莫ニ孤屋下ニモ等閑ナラカレ作者也何ゾ後世

○昔昔南ニカレテ残ニ遺事ナリト云ル

屋

下系とく治の善くおき

○川添ノ馬ナリト云テ言リ

角

坊のみのくちの籠ををり

角

○使能頼テ葉タル人ナリ

足源のみ守しそある末尅しる

屋

○對物也其似氣ナリ笑フベキモノナリ

自息之香人信此の

角

○其ノ子ノ病出トシテヨカニヤラズニ執中ニテ其子母ノ病出ナリ餘情合ニテ附ナシケニ

回の群ト早女舟扱て

屋

○手足毛泥ガ方倒レ井止ニ醫者ノ馳命ニ風情ナリ但全集ニテ病人ノ投置ナキ人論

ヨハ速慮セリ

乃そののそくむ編るの

○前句、其場ノ世ニテ解ト可言當ノ在集ヲ折捨テ聞ニ行タル極ニ用ト言但五

クハキタルトシハナリ一説ニ和讀可見ト言リ但編セニ也即ト讀モ其歌ノナリニ或ニ曰

光師ノ夜世話ニ或時白雄居ヤカノヨ言リ云ハ本ヘテサ浴タルニテ編セテ櫛ナレハ本言

○於六櫛ナトヨ同者ニ在座ニ置テ笠ニサ置ニナレハ新有ニトナリ

竹燈の束が―扱を―と

屋

○扱謝ヲ令極也夜分變化をヨシ

静りよものそくむ編るの

角

○女房ノ扱ス錢トシテ其夫ノ夕夕ニ置也但負家ノ侍自ラナリ

行路中鐘のこもる響くあり

屋

○変化ノ自然也鈴繩トシテ脈繩トシテ張細ニテ魚ヲ取リ且ノ魚細ニテ時ハ鐘音テ鈴ノ鳴也其音ヲ

○其ノミテ方一解也非人食小兒トイテ尾語善惡辨正知リ危顔ト云葉加間テ
アバト言ハリシリノ語也ト可知

羊の豆蜜其れ核ト為リ其蜜ハ用

○會釋也但アバト語言モ蜜其核モ其移リ可味ト云

芥ノ解アノミハ其令言ト云

○セハミキ解ヲ速クリ但解用ナリト云

天ノ有海ト云ハルハ其ノ味ト云

○風ノ中ノ人ト云ハル詞也前ノクハ名詞ト云ハルト云

禪ト云ハルハ其ノ味ト云

○若タル人有三娘ト云ハル細キイトナリ有テト云言リ荷ツル語ト云ハルト云ナリ

幸徳ノ花ノミハ其ノ味ト云

○往來ノサマト云ハル其道ト云

小ノ力ト云ハル月ノミハ其ノ味ト云

○迦ノミハ其ノ味ト云ハル風ト云

代燭ト云ハル其ノ味ト云

○肌寒ト云ハルカサト云ハルト云

ト云ハルト云ハル其ノ味ト云

○常ノトニ云セリ

小窓の傍に 行言をせむるもよし也

角

○自ラ隣ニテ讀風情ニ相借屋可成

りやもふあふはく浮るゝ私

屋

○雨月ニテ其ニム用テ言カお哉ノ言公場ニ非レ論ナリ

孤座旅よりあふる落しゆくもよし

○其ノ言ハナク言カお哉ノ言公場ニ非レ論ナリ

天野氏無行

○其ノ言ハナク言カお哉ノ言公場ニ非レ論ナリ

そとより拾ひ集るゝあふるもよし 松隣

○流行辭は可言撰集抄西行が今骨ヲ集テ形ヲ作りテ又禪語人間ノ辭也

○五色衣ニ骨ヲ色ニカ如ク下言リカク思共モ身任ニ身ヲトクヘ平常ナキ風ニ改メ

○其ノ辭ハ幻ノ身有テ空ニ如ク下言リカク思共モ身任ニ身ヲトクヘ平常ナキ風ニ改メ

らんま 水の流るゝ秋風 野坡

○此言誹諧ノ骨解有テ舊詞血脉也ソカ考レテ秘有テ無物ヲ調テ在ハ水音観想ト言ニテ

入目トおまむんのりちあはれ 利午

○此言シテ渡ルヨ含ク也前々ハ聞テ當リ見止テ是要化ナリ

塔のあやを 桐の蔭 ころも

隣

○風松ト言フ何ナリ其姿ヲ顯シクリ

洞玄ト云フナマある乃をばらふ也

坡

○豪華家賄有ヨリ漸出テ古今披ニ桐ノ四家ノ富貴ナレト云ルヲ見込可成

つもあはれつゝ雨の卒や玉

○泥足ヲ洗ト見テナリ

所の心は是ら遊んたふ

○圃遊見ヨシガニ忌ニキ風情ヲ可見則遊此情後ト針事ナリト云ルナリ

あつた水と長谷をこまめ

○腹ナキヨリ出タリ但大和初瀬寺ノ丸屋出城境野ト言屋有リ此作ノ古歌又

峯別と者を常任強あや

○愚ニ極ナリ語ヨリ階タリ可味

あつた水と長谷の十月の

○在実ニノ字ヲ消テ迹タリを正言

あつた水と長谷の十月の

○玄猪ノ長講ナドノ合可成富貴ノサコニ為タリ

あつた水と長谷の十月の

○臺所ヲ傳ニテ別家ニ成振ヲ述タリ

あつた水と長谷の十月の

系々 悲別 家千 急 入 牛

○外河ニシテ万ノ間ニ情ヲ含ム言ハ可言所並切並ルヤウニ軒ヲ等シ三都中、下ルモ也但

○涼ニシテ元住居ノ暑モ寒モ相違ニ土地ナリ

焼物子組 念々 富田 回 船 浜

○住居坐鋪マヌシノ譽名体トシテ振舞体ニ附タリ組念々語トキ也富田船

伊勢栗谷ト四市ノ間ニ富田ト村アリ蛤ヲ名物トシテ廻所ナリ

隙 子 盗 入 中 掃 牛

○日々ノ銀上ノ帝ト下働ノ男可成

髪 置 冬 雪 駈 思 桑 下 坡

○下ノケ雅小者ヲ河ルマラス有ハ思桑ト云詞ノ残也但鬢鬢直ト云意ナリ

先 沖 入 船 浜

○子供ヲハゲヌ詞トシテ問屋掃ツウジト云言ナリ

肉 菜 花 牛

○鳥羽ノ日加山トシテ遊ブ解トモ可見

あ 川 風 の 吹 長 岡 坡

○キダニヲ整正エタリ

神 無 月 廿 日 深 川 少 郎 興

振 賣 子 雁 名 子 あり 恵 比 壽 講 翁

○春ノ魚ノ類ニハアラテ秋ニ向ヒ春ニ送リ詩歌ノ文人ニモテハヤサレモナルヲ振實ヤフ有様
歌舞遊喜ノ或講拭合テ浮世ノ中ノ盛衰ヲ歎キエフ也實ニ第物風光ニ對シテハ
勿論憂ムシク悲シキニケカリモ觀相ヲ忘レエフスハ非常ナリ

降^レち^や壽^も時^も去^る野^の坡

○春^ノ居^名風^情句^作衰^{ナル}調^ヲ程^名也^{人間}一^生有^世其^余時^雨時^晴待^ス已^ニ

宗^祇舍^哉言^翁ノ^句ヲ^可思

番^近下^極乃^小節^を引^リ祿^ク孤^屋

○休^ト言^語ヨリ^解用^ヲワ^カテ^リ

片^もけ^山月^を見^る利^牛

○春^近言^語古^雅ナル^高業^解歌^聞上^ニル^哉一^首歌^マ成^ラ二^句一^解ト^ハ
ナ^シタ^リ不^奈意^ナリ

好^物の^解を^絶々^思秋^の風^坡

○業^門隱^者ノ^モソ^ト見^定テ^其人^有ソ^ウ一^事ヲ^速ク^則換^骨意^ニテ^其哉^論

ナ^シ但^秋風^ト季^第ノ^用ガ^無用^ノ言^モ也^秋風^カビ^テ合^是則^用也

割^本の^安下^同乃^家箱^箱

○湯^カル^人ト^テ附^テテ^割本^趣向^可味^猶露^霜又^無用^ノ用^也

網^の者^知已^船小^聲か^けて^牛

○薪^舟為^テ附^テ但^太九^者ノ^少ナル^モニ^ナル^変化^大ウ^ケテ^一粒^ニテ^九術^ナリ

星をへ見えぬ二十一日

屋

○闇夜趣向三語イワカカ名但草ノテハ星道ニミズニテ亦合ノ闇夜ト言フモハ也

弘多家まきを殊に軍の大事あり

翁

○五月其日指テ曾我兄弟ノ御狩場出立モウラ趣向三語曰義仲ノリカラ

谷夜討養和元年五月九日也曾我トシヨリハ合戦トシニ方可然カトシ軍ト言フアリ

兄弟後雖ハ軍ト言程トニ非ス三好松永ガ義輝ガ殺セモ五月十八是是ラ唯

夜討支度ト見箱何ト事ニゾニテ扱ナクテ附テ夫トナキヲ却テ余情深カレキモノカ

冷氣集の雪ノ雑沓もせぬ

坡

○父ノ附テ変化大事也美スキト也冷氣雪雲ナルニ其ノ思ヒヤラシクテ

明あらしむ籠提灯を吹消す

屋

○乃意分明也但籠ハ箱ノ字ヲ誤ニテ箱提灯ナリトシテ

肩之癖ノ張る湯屋乃膏薬

牛

○其奈シテ二句一章ト為リ肩ノ癖ノ語面白シ

上並にテ茶刻むいかに此そら

坡

○フトリ肉ノ女ノ肌スキ名盗ニ名ガ如シ変化ハ勿論自他明カナリ

馬ノ如忠日々内侍志士家

翁

○停輩ナシ男ノ風情ニハシ又自他ヲサテリト政ニ曰左未抄ニ人ノ妻ニモ非ス武家所ノ

下世ニモ非ス宿屋回屋ト下世トシテ停定タル作也慮及ベキ非スト實ニ可仰

約賣七ツのつとを音信子と牛

○歩向セテニカカラニ附十三ク但餘情アリ

堀ノ門ある五十石の屋

○月躰ノ愛也附意夕意明ナリ

祇鴻乃織鬼も子をす海月と定翁

○剪語勢情ヲ起ニ徳有鳩奉行トニテイダヤニキ夷ホモ心服ニカ思ハク述タリ

砂ノ子あそびの砂る孝子坡

○悦樂公妾トシテ花下景色ヲ云リ九音中ヲ寫人物ヲ知テ頭セリ亦越堀場非

新畑乃養也の底は雪女と屋

○川原表トシテ開發、新田トシテ

吹雪らしき多めは笠とりと牛

○東南ノ風吹コトナレハ其趣ノ三ナリ

川越ノ乃帯ノ女をあふかき坡

○方一躰ニシテ女帯ノ意ナリ但ニ帯ニハ腰ノカクトイフ義ナリ

平地の寺は、うきと数垣翁

○平地ノ水辺前後垣薄キ其透間ヨリ渡ニ場ニ元躰ヲ何トナク野寺ノ三ニテナリ

于物を日向の方へ以てらせと牛

○其場ニシテ明カナリ

埒出は鴨乃芭也望くあり
屋

○井ノ許ヨサステ物トシテ鴨ノ趣向ハ變化ノトツナリ

筭用り浮世を多てる京住居
翁

○塩物ヨリ浴ノ生モノ不自由ノ地ヲクタクエリ

又沙汰多しに娘よありあり
坡

○美術ノ師トシテ細キイトナシノ歳子ヲ産ミラニ賅也

堂のふとこと大晦日と亥尅の鐘
屋

○勺作ヨカシニナリ

字筆多の彰む状の治先
牛

○前句無用ナリ用ヲ附出セリ但ト多ク語ニ無筆トビキニテトカキ意味ハ尅ノ鐘ニ應セリ

中好て傍輩合の供いらぬ
坡

○好ム人語ナリ但女風アリ餘情ハニツトハ時預ヲ置タル物ヲ取立ル趣ナリ

聲を多くききし梅世思夕月
翁

○キモ毛帯モノ物ニテ祭ノ夜宮ナド出カル者トモニニ偏ニ此附安ナルヲ可感

風止る秋の酔れ尻下り
牛

○青樓ノ酔ヲ吹ニ遊僕ノ徒真崎アタリユカレ未レ風情ナド三但風止テノ語ハ遊興ノツキナリ

○會リ鴨ノ隅田川ノ趣ナリ尻下リハ曳沙ニ流ル安ナリ

鯉乃巧子れ網をむのちる
屋

○鴈下言リ隅田ノ洲崎村ノ生洲ニ為リ洲崎村ハ向寫下言

ちろほろと茶の揚場の行三郎

翁

○傷久影遠ク水面ニ移リテ魚驚ク意ヲ含ムリ但テテラト言語ニカゲタルコトヲアラス

月馬ノ糸ノれつきの新長

坡

○行ッ底ニテ弁ルトニテ生酔ノ風情ニ変化シ来リテホキウ起情ト云条ニ方止ルベシ

とこもかじとをれ三月中時分

屋

○附方ハ分明也石ニ於テハ花一字ナカリセハ前句ヲ導ナラニ百変ノ所味ニ可知

瀟岸はさきを拂ふ春風

舟

○附方分明也野風呂蓑魚趣向カラホ越テ遠慮有リ岸ハガリテ其軌ヲ導ナラニ

雪は松を色口見れば

杉風

○詩歌故事ヨカラカ名聞ヨカラス在ルニ此ノ生質モユキニ心カスル但寒ノ字ニ冷ニ其モウラ

日孔ゆるまのあき冬空

孤屋

○疾起出テニル趣雪後ノ景色言モサラナリ

下者を一舟濱よあ明て

翁

○海邊景色ト三日和モヤウト定テ果テ賅ヲ宣リ但下者ハ翺鯉ノ類時節相應セリ

方々さかぬ大名の信

子珊

○通リ加々下思ヒニ又来ル趣ナラニ餘情アリ

身ヲあはる風も好しく薄月夜

桃隣

○羽折の姿ヲ形容セリ急クサマ可成

粟を刈りて身を廣き圃地

利牛

○クラリトシ名所ヲ可見

熊谷に堤き禮多る秋の菊

出水

○廣キト言ヨリ漂々タル水面ノモウヲ言リ

箱根へく松魚大なる愛家

野坡

○水難カラ俄高企ニシテ但虚解ト薄ク

二三冬に暮るる門の照

子珊

○前夕ノフリ高更トモミルキニ此方ハ箱モニツテ並テ早は優中難モルニ道風情ナラシ

馬乃の荷物のおるに

沽圃

○出合ハ馬ニサハルセニカクモナルベシ

竹の皮、雪詰り、積る夏は

石菊

○高高ナルモヤウ有ヨリ竹ノ皮ノ荷トミテ言リ今作ヲカシ

稲ふ子のやすす雨のたまり

杉風

○移リ言語ニ述難ニ但竹ノ皮ニカクノ語ニヒキテ言シ

手前者の一人も見えぬ浦の秋

野坡

○初秋ニ為テ手ヲ移セリ猶寂ヲ餘スベシ但手前者トハ令限者也

めつこみ風乃たるる魚互
利合

浦里自然場ナリ
理歎

宵の月とかりに臨大工
依々

盆過せし折上言流行病節ニ故郷ノシクニ趣ヲ附タリ
沐風

脊中へのちる子を可也か家
桃隣

番近故郷見有べし
五箇

茶是のきハ泣く上り
子珊

茶ヲモム女子に樽ス唯其具分リテ出テ其趣ヲ顯スル可感
圃

川かろし
石菊

。脊中廣ミト村ニ何事門構可成但裏々数外川ナルニ但仁ラスト入ニ非ニ意ナク也

朝雲晴て云れ味とさ
杉風

。氣味ヨキ趣ヲ整ヌタリ

脊中へ口申ハ山ノ行道
空水

。前夕ブラリトシテ趣有ヨリ与集テテ一躰トシテ越ノ論ナシ尤前ニ川有ヨリ物好ニテ

後口ハ山ノ屋鋪ドリト趣向セシガ故人ノ手段疎カニルカラス
孤屋

お思ひはるる
孤屋

。ソナラヌ戀路心スニテ風情ナラ唯何トナシ出タル躰ニ附ナシタリ
曾良

取集イ
曾良

○食美ノ進マ又趣ナラン但夫カ妻ニ別ル餘意モ有

曾身

○餅米を搗て俵へおかりナク

桃隣

○年回ノ手當ナルベシ

依

○わさくあせてナ系代の禮

依

○年暮モウツテ趣向ニクラン

沾圃

○雪舟傳おくり自撰と記出はし

子珊

○幸ヒトミテモモツラン

子珊

○隣へ行つて火を取る事候

○前躰無用ナリ奈テ一草ト云但隣ト云道具屋ノ店ガキナルベシ

又々、船も佛乃、船を埒をあま

利牛

○裏店カリ獨住ノ坊主持シテ貯用ノ変アリ

杉風

換をかりして買ふ事候あり

利合

○相場師某氏言亦貯用也但前躰ナリト云察セヨ世ニ章ゾモ換骨ト云ト云越後倫

大坂に人出候花ちる冬此月

利合

○物ニアルモ人々冬ノ月寄テ前ウツナギキナリ

野坡

酒にともほまじを祖母の乳お入

野坡

○カケテ者智ニタルト言思分附ナシテ前ウツ虚貯ト為名ヨリ越論ナリ

すくけぬる御茶の落乃をけり

子珊

